中部大学大学院　国際人間学研究科レポート

2014 Vol.5

# GLOCAL

Forum


■運動経験がもたらす情動知能への影響 ―― 西垣景太
■社会性の発達に寄与する子どもの「誤った」意図判断 ―― 佐藤友美
■中国同時代文学における「規範」への服従と、それからの逸脱について ―― 和田知久


Symposium


■プラスマイナスゼロのやる気を支える「幸福感」 ―― 速水敏彦
■就職難で苦闘する現代青年は「不幸」か キャリア発達心理学の視点から ―― 杉本英晴


Note


■大正昭和期における交通インフラと地域 ―― 林　泰正
■アニメとイスラム　アラビア語イスラム社会における日本アニメのローカリゼーションとその背景的要因 ―― ハルメシ, リマ


News & Record


■2013年度修士論文・博士論文の審査、学位授与式
■若手教員研究報告会・院生研究報告会を開催
■心理学専攻教員によるシンポジウムを開催



中部大学大学院国際人間学研究科
Chubu University Graduate School of Global Humanics

# ごあいさつ

中部大学大学院、国際人間学研究科レポート GLOCAL Vol.5をお届け致します。

本年2014年は、中部大学の開学50周年という記念すべき年にあたります。国際人間学研究科は、中部大学国際関係学部を基礎に1991年に創設された国際関係学研究科国際関係学専攻をルーツとして発足致しました。その後、人文学部（1998年設立）を基礎とする2専攻（言語文化専攻、心理学専攻）が2004年に合流して国際人間学研究科として組織・名称を改め、さらに2008年には歴史学・地理学専攻が加わって現在の体制が整いました。

小誌名の由来でもありますGLOBALとLOCALの相互関係は、近年、ますます重要性を増しております。周知のように、少子高齢化・人口減少が進行中の日本は、これまで以上に、海外（G）に市場を求めていかざるをえませんが、その一方で、産業構造は国内（L）中心のサービス産業のウエートが増しています。本研究科としては、G(外）とL(内）の2つの視点からものごとをバランスよく考え、適切に対応できる人材を育て上げていきたいと考えております。

小誌を通して、本研究科の日頃の活動の一端がご理解いただければ幸いに存じます。

2014年10月22日

林　　上（中部大学国際人間学研究科長）

GLOCAL

GLOCALは、GLOBALとLOCALを組み合わせた造語であり、地球規模でのグローバルと身近なローカルを、ともに等しく重視する考え方を意味しています。

Profile
スポーツ保健医療学科　講師
西 垣 景 太（NISHIGAKI Keita）
中部大学大学院国際人間学研究科心理学専攻博士後期課程修了。
専門は体育心理学、スポーツ心理学。修士（体育学）（東海大学）、博士（心理学）（中部大学）。
近著「体育の教科書　指導用」（共著）（2010、データハウス）

Forum

# 運動経験がもたらす情動知能への影響

## はじめに

筆者は体育学士と体育学修士を取得しており、研究の専門領域は体育心理学・スポーツ心理学である。

心理学に興味を持ち始めたのは、学部生の頃にテレビで「キレる」という言葉を聴くようになり、運動・スポーツ場面での心のコントロールについて考えるようになったのがきっかけである。運動・スポーツ場面では、自分自身や他者の心のコントロールの機会が多くあり、良いパフォーマンスを発揮したり、良いチームワークを構築したりするためには、重要な要素であると考えられる。そこで、運動経験と自他の心のコントロールに関わる能力は、どのような関連を示すのかを明らかにすることを研究テーマとした。

以下の文章は、中部大学大学院国際人間学研究科心理学専攻博士後期課程において、博士（心理学）の学位を取得した際の論文の概要を紹介するものである。内容についての更なる詳細は、論文を参照されたい。

## 研究の背景と目的

### 1．研究の背景

文部科学省は、2011年8月に「子どもたちのコミュニケーション能力を育むために」という具体的なテーマのもと審議経過報告を挙げた。そのうち、子どもたちのコミュニケーション能力が求められる要因の1つとして、このような時代を生きる子どもたちは、積極的な「開かれた個」（自己を確立しつつ、他者を受容し、多様な価値観を持つ人々と共に思考し、協力・協働しながら課題を解決し、新たな価値を生み出しながら社会に貢献することができる個人）であることが求められるとしている。現在の子どもたちの課題としては、インターネットを通じたコミュニケーション手段が普及しているとともに、外での遊びや自然体験等の機会の減少により、身体性や身体感覚が乏しくなっていることが、他者との関係づくりに負の影響を及ぼしていると指摘している（文部科学省, 2011）。

スポーツ心理学領域においても、子ども達の運動経験によって心のコントロールができるようになるかという研究が「社会的スキル」や「ライフスキル」といった概念を用いて研究が進められている。しかし、どのような運動経験による効果なのか、どのような指導が有効的なのかなど、明らかになっていない点は多い。その中で、本研究では情動知能（Emotional Intelligence）という概念に着目した。

### 2．情動知能とは

情動知能とは、Gardner（1983）が提唱した多重知能理論（multiple intelligences）や、Thorndike（1920）が提唱した社会的知能（Social Intelligence）を背景とし、Salovey & Mayer（1990）が提唱した概念である。Mayer & Salovey（1995）は、情動知能が対人間、あるいは様々な社会状況において生じる複雑な問題において大きな役割を果たすことを提唱し、情動知能に関する定義に修正を加えながら、「情動を知覚し、思考を助けるために情動を利用すること。また、情動及び情動の知識を理解し、情緒及び知的な成長を促すように情動を制御すること。」と定義づけた（Mayer & Salovey,1997）。

また、Goleman（1995）が出版した“Emotional Intelligence”は、世界的なベストセラーとなり、Time誌などの多くのマスコミに取り上げられた。Time誌が「EQ」という見出しを付けたことで、「EQ」という言葉で情動知能が広まるきっかけとなった。「EQ」は、「Emotional Intelligence Quotient」や「Emotional Quotient」として「心の知能指数」と訳され、知能指数（IQ）と対立するものではなく、両者のバランスが重要で、相互に不可欠なものだとされている（ゴールマン, 1996）。Goleman（1995）は、情動知能を「自分自身を動機づけ、挫折しても我慢強く頑張れる能力、衝動をコントロールし快楽を我慢できる能力、自分の気分をうまく整え情動の乱れに思考力を阻害されない能力、他人に共感でき希望を維持できる能力」と定義づけ、会社や学校での成功に重要な役割を果たすものとして取り上げている。さらに、情動知能の重要な特徴の1つとして、先天的

な要素が少なく、教育や学習を通して改善や習得されるものであることを強調している。

情動知能の評価は、内山・島井・宇津木・大竹（2001）が作成した尺度をもとに、自己洞察や自己に対する動機づけなど自己に対する情動の認知やコントロールに関する「自己対応（intrapersonal）」、共感性や愛他心など他者への情動の認知やコントロールに関する「対人対応（interpersonal）」、状況洞察やリーダーシップなど状況に応じた情動の利用に関する「状況対応（situational）」の3つの領域と、3つの合計点によって評価を行うこととした。

### 3. 研究の目的

運動場面においては、情動の知覚や理解、状況に応じた利用の場面が多くあり、運動経験が情動知能の向上に効果的であるという仮説を立て、その関連性を明らかにするために以下の3つのことを目的とした。

第1に、運動経験と情動知能の関連についての検討として、大学生を対象とした調査を行った。大学生を対象とした運動経験と情動知能の関連を調査した先行研究があるものの、横断的な調査にとどまっている。しかし、運動経験と情動知能の向上の因果的関係を明らかにしていくためには、調査対象者の時系列的な変化を検討していく縦断的な調査を進めていくことも必要だと考えられる。そのため、運動経験によって情動知能が効果的に向上することを明らかにするため、縦断的な調査と過去の運動経験に遡って検討するための回顧的な調査から、運動経験と情動知能の向上について明らかにすることを目的とする。

第2に、心身の発達過程の中で、児童期や青年期といった時期と、運動経験の要因から、情動知能への影響を明らかにすることである。特に、社会性の形成にとって大切な時期である児童期の運動経験と情動知能の向上についての研究は皆無である。そのため、児童期の運動経験に着目し、その関連性を明らかにすることを目的とした。

第3に、研究の最終目標である情動知能の効果的な向上を目指した運動指導法について検討するため、指導者自身が指導場面において情動知能の向上をどの程度意識しているのかを明らかにすることを目的とした。また、指導方法に対する意識との関連も検討することとした（第1章）。

## 結果の概要

### 1. 大学生の縦断的検討と回顧的検討からみる運動経験と情動知能の関連（第2章）

#### 1）大学生の縦断的調査

スポーツ系学科の大学生を対象とした2年間にわたる計5回の縦断的な調査を実施した。その結果、1年生の頃の情動知能の得点よりも3年生での5回目の調査での得点が、情動知能の「自己対応」、「対人対応」、「状況対応」に応じた領域の得点全般に有意な向上が示された。また、内山ら（2001）が示した一般学生の得点よりも高い得点を示した。また、本研究では、全5回の合計得点において、1年生から3年生まで運動部に所属し続けた運動部所属群よりも、その他の群が、情動知能の合計点と「対人対応」の得点が有意に高い結果となった。この結果は、その他の群には学外で運動を継続している学生も含まれている事も影響していると考えられるため、更なる分析と調査対象者を増やした比較検討も今後の研究として求められる（第1節）。

#### 2）大学生の回顧的調査

大学生を対象とした過去の運動経験からの回顧的な調査では、現在の運動経験のみならず、小学生の頃からの過去の運動経験を広く捉え、大学生の頃の情動知能の得点にどのような影響を与えているのかを検討した。その結果、男子と女子では、運動経験の日数や運動に対する熱心さなどの要因が情動知能に与える影響は異なることが明らかになった。また、男子の方が、小学校から中学や高校へと学年が上がるにつれて、運動経験年数や熱心さなどの運動経験の影響が大きくなっていくことが明らかになった。さらに、運動経験の有無による所属要因では、男女ともに中学、高校、大学での運動部への所属経験よりも、小学校の頃の運動経験の有無が、大学生の頃の高い情動知能の得点に関連を示している結果が得られた（第2節）。

### 2. 児童期の運動経験がもたらす情動知能への影響（第3章）

#### 1）児童期の習い事による検討

この章では、児童期の運動経験に着目し、運動系の習い事と、その他の習い事について情動知能への影響の違いを検討した。その結果、運動系の習い事の要因が情動知能と有意な正の相関を示したのに対し、運動以外の習い事では情動知能との有意な相関はないことが明らかになった。そのため、運動以外の習い事では得られない情動知能への要因が、児童期の運動経験にはあることが示された。

また、小学校の低学年と高学年を比較した結果、自尊感情が未発達な低学年においては、自分自身の情動知能を過大もしくは過小評価しており、他者評価との一致を示さないのに対し、高学年になると徐々に他者評価との一致を示す結果となった。したがって、情動知能は児童期の低学年から高学年にかけて成長の過程を示し、自己の情動知能を正しく把握することが明らかになった。

運動経験の要因の面からは、低学年では、より熱心に、より楽しく感じる運動系の習い事が、情動知能の「自己対応」の領域全般と特に「目標追求」に関する項目、他者への「気配り」に関する項目への意識を高めることが明らかになった。また、高学年においては、運動系の習い事の数を多く経験することや、より熱心に、より楽しく感じる運動系の習い事の経験が、情動知能の他者への「協力」、状況に応じた面での「楽天主義」や「人材活用力」への意識を高めることが明らかになった（第1節）。

#### 2）児童期の運動教室による効果

児童期の運動教室による約1ヵ月という短期の縦断的な調査を実施した。異なる2集団への調査において、走力という運動能力の向上とともに、教室の前後で情動知能への変化が見られるかを検討した。その結果、走力の有意な向上も認められ、1つの集団では、情

動知能の合計点と「自己対応」、もう一方の集団でも合計点と「自己対応」「状況対応」の有意な向上が明らかになった。したがって、運動能力や目標が異なる集団では、運動能力のレベルや熱心度により、運動経験要因と情動知能の得点への影響は異なることが明らかになった。これらの結果から、運動能力の変化とともに、自分自身への動機づけや、その集団での自分の社会的地位などが変化することにより、情動知能への関連も異なってくることが考えられる（第2節）。

**3．運動指導と情動知能の意識の関連（第4章）**

これまでの研究では、習い事や部活動という運動経験に着目してきたが、全児童に共通に与えられる運動の機会として、体育の授業に着目した。中学校や高校では保健体育の専門教員が体育の授業を行う。また、近年では幼稚園でも内部や外部の体育の専門教員が運動指導を行うことが増えている。一方で、心身の重要な成長の時期である小学校での体育の授業においては、体育の専門教員でないことが多い。そこで、小学校の教員の指導の意識が重要であると考え、教員の体育の授業における情動知能や指導法への意識を調査した。

その結果、指導歴と性別による分析から、指導法に関する中でも児童の意見を聴こうとする「傾聴」の因子にのみ有意差が認められた。指導歴中期間の男性教員が指導歴短期間の男性教員よりも有意に高い意識を持っており、指導歴中期間の教員の中では女性よりも男性教員が有意に高い得点を示した。しかし、情動知能への意識などその他の項目においては、性別や指導歴による有意な差はなく、個人の意識の差によるものであった。

また、情動知能への意識と指導法への意識には、どの要因においても有意な正の相関が認められたことから、指導法への意識を高めることが体育の授業での情動知能への意識を高めることへもつながることが考えられる。情動知能と指導法への意識としては、全体的に肯定的な高い得点が得られたが、自由記述の内容からは、45分という授業時間や、安全面への意識で、情動知能に関するような意識まで及ばないという回答も得られた。

## 総合考察と今後の課題

これらの調査結果から、運動経験と情動知能の関連として、大学生を対象とした縦断的、回顧的な検討から、運動を継続することによる情動知能への影響として、運動を経験する時期や集団、性差による新たな関連性を示す結果が得られた。

また、大学生を対象とした研究が多くみられた先行研究の中、本研究では児童期の運動経験にも着目した。児童期の低学年と高学年による情動知能への意識の変化を明らかにし、運動とその他の習い事による要因では、情動知能に与える影響は異なり、他の経験よりも運動経験が情動知能を高めるためには有効であることが示唆された。さらに、運動能力の向上と情動知能への影響においても、集団や性差によって関連の仕方が異なることも明らかになったことは、本研究の大きな成果であると考えられる。

指導側に着目した研究結果からは、指導歴や性別による差は「傾聴」に関する項目のみで、個人による意識の差が影響することが示された。また、情動知能への意識と指導法への意識には関連性があることも示された。体育を苦手とする教員もいることは考えられるが、その授業を受ける児童のためにも、効果的な指導法として学習指導要領とともにガイドラインを示すことが有効ではないかと考えられる。今後、指導法に関する具体的な効果と、調査対象者を中学生や高校生とし、思春期の運動経験と情動知能の関連についても、より具体的な要因を明らかにしていく必要がある。

また、研究方法としては、調査対象者の人数をさらに増やすこと、群分けの更なる検討を行っていくこと、長期の縦断的調査を継続していくことなどから、運動経験が情動知能の効果的な向上につながることを明らかにしていくことが求められる。

それらの研究結果は、コミュニケーション能力の低下が問題視される今日において、運動場面を用いて、情動知能を効果的に向上させていく指導法への一助となると考えられる（第5章、第6章）。

## 謝辞

学位を取得するにあたり、最後まで丁寧に研究の方向性や詳細についてご指導くださいました、指導教授の速水敏彦先生、副指導教授の小川浩先生、吉住隆弘先生、学外の審査員としてもご指導くださいました小塩真司先生（早稲田大学）に感謝申し上げます。また、報告会や公聴会でもご意見頂きました国際人間学研究科の先生方にも御礼申し上げます。今後、研究活動を進めていく中で、少しでも恩返しができるよう努力していきたいと思います。

引用文献

ダニエル・ゴールマン（1996）土屋京子（訳）EQ～こころの知能指数～．講談社：東京．

Goleman, D.(1995) Emotional intelligence. : Why it can matter more than IQ. Bloomsbury : London.

Mayer, J. D., and Salovey, P.(1995) Emotional Intelligence and the construction and regulation of feelings. Applied & Preventive Psychology, 4, 197-208.

Mayer, J. D., and Salovey, P.(1997) What is emotional intelligence?. In P. Salovey & D. Sluyter(Eds.), Emotional development and emotional intelligence: Educational implications, Basic Book : New York, 3-34.

文部科学省（2011）子どもたちのコミュニケーション能力を育むために～「話し合う･創る･表現する」ワークショップへの取組～．コミュニケーション教育推進会議審議経過報告．（http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/23/08/1310607.htm）

Salovey, P., and Mayer, J. D. (1990) Emotional intelligence. Imagination, Cognition and Personality, 9 : 185-211.

内山喜久雄･島井哲史･宇津木成介･大竹恵子（2001）EQSマニュアル．実務教育出版：東京．

Profile
国際人間学研究科心理学専攻　講師
佐　藤　友　美（SATO Tomomi）
2012年お茶の水女子大学人間文化創成科学研究科博士後期課程修了。博士（人文科学）。専門分野は発達心理学。特に幼児期・児童期の子どもを対象に、社会性の発達について研究を行っている。

Forum

# 社会性の発達に寄与する子どもの「誤った」意図判断

## 他者との良好な関係性の維持・構築には何が必要なのか

ヒトは「ソーシャルアニマル」である（Aronson, 1992）。ヒトは社会を構成し、他者との関わりの中で生きている。社会の中で適応的に生きるためには、他者と良好な関係を構築したり維持したりする能力が不可欠である。人が他者と良好な関係性を築きそれを維持していく能力とはどのようなものだろうか。そしてその能力は発達過程の中でどのように獲得されていくのだろうか。このような、社会性に寄与する能力とその発達過程の解明が、著者の研究テーマである。

## 社会性の認知基盤としての意図理解

社会性に寄与する能力の一つとして、「他者の心の理解」を挙げることができる。他者の心の理解とは、他者の感情、欲求、意図を正しく推測することをいう。その中でも「他者の心の理解」の中でも特に重要な能力として、他者が何故ある行為を行ったのかを理解する他者の「意図」の理解が挙げられる。他者の意図の理解は、その他者への対応の仕方に直接影響を及ぼし、さらには他者との関係性にも影響を及ぼす。たとえば、“自分が作っていた積み木のお城を友だちが壊した”という状況を考えてみたい。もし友だちが故意に壊したのであれば、友だちに対して異議申し立てをするが、もし壊したのが過失なのであれば、許すだろう。ここで相手の意図を誤って判断すると、他者との関係性は悪化しうる。もし相手が壊すつもりはなかったのにもかかわらず壊してしまったときに、相手の意図を「わざと壊そうとしたのだ」と誤って解釈すると、相手を不当に非難することにつながる。実際、このような誤った判断をする傾向の高い子どもは、相手に対する攻撃的行動の頻度が高く、さらには他者との良好な関係性を構築することも困難になる（Crick & Dodge, 1994）。つまり、意図を正確に判断する能力が、他者との良好な関係性の構築・維持に重要であるといえる。

大人は、他者の意図をある程度容易に正確に理解できる。しかしこの能力は生得的に備わっているわけではない。意図の正しい判断は5、6歳以降に獲得されるといわれている（Schult, 2002）。それでは、正しい意図判断ができない子どもはどのように意図を判断しているのだろうか。

本来意図は、行為によって引き起こされた結果の内容に関わらず行為に注目して判断しなければならない。たとえば、友だちが壊したという結果が故意的だったのか過失だったのかを判断するためには、友だちが「どのような行動をとって」壊したのかに注目しなければならない。もし、強く積み木を押したのであれば、それは故意的であると判断できるが、もしそばにある積み木に躓いて転び、手が積み木にぶつかったのであれば、それは過失であったと考えられる。さらに、積み木のお城が壊れなかったとしても、相手が押したのであればそれは故意に壊そうとしたのであり、転んで手がぶつかったのであれば壊そうという意図はなかったといえる。つまり結果がどうであれ、行為から意図は判断されなければならない。

しかし子どもは、意図を判断する際に結果に注目してしまうという意図理解の未熟さを持っている（Schult, 2002）。つまり、お城が壊れればそれは故意的であり、壊れなければ故意的ではないと判断するのである。このように、子どもは結果に注目することで、誤った意図判断をすることが示されてきた。しかしこうした従来の知見は、他者とのやりとりのない、つまり社会的なコンテクストとは切り離された状況において見い出されてきた。

具体的には、自分で作った積み木のお城を自分で壊したときの、自分自身の意図を判断させていた。しかし対人関係の構築・維持に関わる意図判断を明らかにするためには、社会的なコンテクストに埋めこまれた意図、つまり自分に影響を及ぼしてくる他者の意図を正しく判断する必要がある。具体的には、自分が作ったお城を壊してきた相手の意図をどのように判断しているのかを検討する必要がある。これまでの知見のように、子どもが動

作主の意図判断をする際に結果に注目しているとすると、相手はわざと壊したわけではないのに、わざとだと判断され、理不尽に非難してしまう可能性がある。したがって、子ども同士の関係性は、良好なものであるとは考えづらい。しかし、園での生活などを観察すればわかるとおり、子どもは子どもなりに仲良く生活している。とすると、子どもの相手の意図判断には、結果バイアスだけでなく、その結果バイアスを和らげる別のバイアスも働いていると考えられる。それが、「肯定バイアス」である。

## 意図判断における結果バイアスを和らげる肯定バイアス

肯定バイアス（positivity bias）とは、自己や他者を過度に好意的に解釈する偏りのことをいい、9歳ころまで持ち続ける頑健な偏りであるといわれている（Lockhart et al., 2002）。肯定バイアスが子どもの動作主の意図判断にも影響を及ぼしていれば、次のような意図判断が予測される。肯定バイアスが働くと、相手は自分に意地悪をしようとしているわけではない、と偏って考える。したがって、積み木が壊れても壊れなくても、また強く押しても転んで手がぶつかっても、相手はわざとではないと判断する。つまり、子どもの相手の意図判断に肯定バイアスが影響を及ぼすことによって、結果バイアスによる敵意的な意図判断が低減されると予測されるのである。

そこで著者は幼稚園や保育園に通う子どもを対象として、面接実験を行った。実験の結果、子どもは「壊れたからわざとであり、壊れなかったからわざとではない」という推論をしていると考えられ、これは結果バイアスが子どもの相手の意図判断に影響を及ぼしていることを表していた。加えて、子どもは「壊れても壊れなくてもうっかりだった」という推論をしていることも示され、相手は自分を邪魔しようとしたわけではないと判断する肯定バイアスが影響を及ぼしていることが示された。

さらにこの肯定バイアスは、相手に邪魔されるといった状況だけでなく、相手が自分を助けてくれるといった状況においても見られ、頑健なバイアスであることも示された。さらに、大学生には肯定バイアスは見られないことから、肯定バイアスは子ども独自の判断バイアスであることも明らかになった（Sato & Wakebe, 2014）。

## 意図判断における肯定バイアスの役割とは

それでは子どもの意図判断において、肯定バイアスはどのような役割を担っているのだろうか。もし結果バイアスによる敵意的な意図判断をしてしまったとしても、他者との葛藤に陥ったときに対応できるスキル（社会的スキル）さえあれば、肯定バイアスは必要ない。たとえば、うっかりであるにもかかわらずわざとだと判断したとしても、なぜそういうことをするのかと冷静に相手に尋ねるスキルがあれば、結果バイアスがあったとしても他者との関係性はさほど悪化しないと考えられる。しかし、子どもは社会的スキルが未熟であるといわれている。実際、幼児は一度相手が自分を妨害したと判断すると、相手を許すといった対応をとることが困難であるという（早川・荻野, 2009）。つまり、社会的スキルの未熟な子どもにとって、他者との関係性の悪化を避けるためには、相手の意図を故意的と判断することを、事前に避けることが重要であると考えられる。肯定バイアスは、意図の判断自体を故意ではないと偏らせるバイアスである。つまり、相手の意図を故意的であると判断することを事前に回避させるバイアスであるといえる。このように、肯定バイアスは子どもの社会性の未熟さを補完する形で、他者との良好な関係性を構築・維持する役割を担っているといえるだろう。

## 子どもの「誤った」判断は社会性や意図判断の発達の触媒となる？

子どもの持つ肯定バイアスは、相手が故意であるにもかかわらず、過失であると判断するような、意図の誤った判断を引き起こす。従来の発達観によると、子どもの誤った判断は未熟さの現れであり、大人と同じ判断ができるようになることが重要であるとされてきた。したがって従来の発達観に依れば、肯定バイアスも未熟さの現れであり、是正されるべきものである。実際、肯定バイアスが大人になっても残ると、不適応になりかねない。たとえば、相手はわざとではないと判断することで、他者から騙されて不利益を被るような事態も生じるだろう。しかし幼児期においては、未熟さともいえる肯定バイアスこそが、他者との関係性を支えているのではないだろうか。

現在、この仮説を検証するために、同一の子どもの意図判断の発達を2年、3年と追跡するプロジェクトを進行中である。動作主の意図判断における肯定バイアスが強い子どもほど、他者との良好な関係性を構築したり維持したりできているのだろうか。また、2、3年後の他者との関係性にまで肯定バイアスは影響を及ぼしているのだろうか。このような検討を重ねることで、子どもの発達における、子どもが持つ「誤った」バイアスの意義をより明確にしていきたいと考えている。

主要引用文献

Crick, N. R. & Dodge, K. A. (1994). A review and reformulation of social information-processing mechanisms in children's social adjustment. *Psychological Bulletin, 115,* 74-101.
Lockhart, K. L., Chang, B., & Story, T. (2002). Young children's beliefs about the stability of traits: Protective optimism? *Child Development. 73,* 1408-1430.
Sato, T & Wakebe, T. (2014). How do young children judge intentions of an agent affecting a patient? Outcome-based judgment and positivity, *Journal of Experimental Child Psychology*, 118, 93-100.
Schult, C. A. (2002). Children's understanding of the distinction between intentions and desires. *Child Development, 73,* 1727-1747.

Profile

国際人間学研究科　国際関係学専攻／
国際関係学部　中国語中国関係学科　講師

和 田 知 久（わだ ともひさ）

1969年生まれ。2001年に大阪外国語大学大学院言語社会研究科博士後期課程を単位取得退学。2009年より中部大学講師。主たる研究領域は、1980年代以降の小説作品・文学制度を中心とした中国同時代文学。

Forum

# 中国同時代文学における「規範」への服従と、それからの逸脱について

## はじめに

1942年5月23日、延安で行われた文芸座談会の締めくくりに、毛沢東は数十名の文学者、芸術家と中国共産党幹部を前にして、プロレタリア階級の文学、芸術は「革命という機械全体の中の“歯車やネジ釘”」であると説いた。

この文芸座談会は、中国共産党にとっては国民政府の包囲攻撃を受けつつ日本軍とも戦わねばならない絶体絶命の危機にあった時期に、支配地域の文学者や芸術家たちを、党の指導の下に組み入れることを目的として行われたのであるが、そこでの講話はやがて全中国の芸術運動を指導する基本理論となった。「政治に偉大な影響を与えるもの」であるからこそ「文芸は政治に従属するものである」と規定したこの「文芸講話」は、国共内戦、中華人民共和国建国期を経て、その後も中国の文学、芸術を呪縛する存在として君臨し続けた。

毛沢東の死去と「四人組」の逮捕により文化大革命が収束するのと前後して、「文革後」の中国文学が再始動する。時折、守旧派による反撃と揺り戻しを経ながらも、創作の自由が公然と提起され、中国文学は一時、政治の桎梏から解き放たれたかのような活況を呈した。20世紀中頃までの西側の近代文学作品や文学理論の精華が翻訳などの形で急速かつ無秩序に紹介され、その影響を受けて、文体や物語展開の実験を大胆に試みた作品が登場したり、反逆精神に満ちた若い主人公が旧来の価値意識を拒絶するというような作品が登場したりもした。しかし、1989年春に中国各地で巻き起こった民主化要求運動が6月4日未明、武力によって鎮圧されると、この自由で多様な創作や研究の流れは数年間息を潜めることを余儀なくされた。やはり文学は政治に服従させられたのである。

1990年代に入ると、中国経済はインフレを伴いながらも驚異的な急成長を遂げる。このことは、政治機構を含めて市場経済に適応するための大規模な社会変革を促すことになった。文化・出版・メディア業界にも市場経済の大波は押し寄せ、市場価値を追求せざるを得なくなり、作家自身にとっても出版文化と創作環境の大きな変化は看過できるものではなく、自己変革や調整を迫られることになった。

一方で、政治・経済構造の変化に応じて、かつてのような中央権力と共産党イデオロギーによる思想統制の力は明らかに減少し弛緩した。それに代わる社会規範力として働き始めたのは商業主義という資本の論理であったが、その間隙を縫って魅力的な文学も多く登場した。民主化運動弾圧時に海外に逃れた作家を含めて、1980年代に作家として成功し、90年代にさらにその創作を深化させたベテラン作家による成熟した高レベルの文学も書かれ、その中からはノーベル文学賞受賞者も輩出することとなった。

果たして、現在の中国文学は政治への従属状態から解き放たれているのだろうか。そして、政治の側は文学の逸脱を易々と許しているのだろうか。ここでは重点作品扶助制度の創設と茅盾文学賞の改革に着目し、それにいたるまでの経緯をたどりつつ、同時代中国における新しい「政治と文学の関係」について考察してみたい。

## 既製の文学制度への不信と批判

近年中国では、ブログなどで公開した見解をめぐって巻き起こった論争が広く社会一般の話題となることがある。若手の人気作家韓寒と著名な文学評論家である白燁による論争は「韓白の争い」と呼ばれた。ベストセラーを続出し商業主義的な成功を収めた若手作家を文壇の住人たり得ぬ文学愛好者と批判する白燁に対して、韓寒は文壇が持つ狭隘な業界意識やその象徴としての中国作家協会、そして「茅盾文学賞」をはじめとする文学賞制度への反発を、嫌悪に満ちた言辞で綴った。

中国作家協会は、中華人民共和国建国前夜、1949年7月に結成された文学芸術界の全国的統一機関の下部組織である中華全国文学工作者協会をその前身としている。その「規約」によれば、「作家を組織して」「党の方針と政策を学習させ、社会主義的価値観を実践し」「文学創作の正確な方向を堅持させる」こと

を任務とする、文芸政策執行のための中国共産党一党独裁体制下における行政組織の一つである。茅盾文学賞とは、魯迅文学賞などとともに中国作家協会が主催する文学賞であり、中国の長編小説にとっては最も栄誉と権威のある賞の一つである。

2003年11月、「茅盾文学賞と長編小説の創作」をテーマとする学術討論会が開催され、中国作家協会副主席をはじめ、多数の幹部官僚や作家、評論家が参加した。その席上、茅盾文学賞の抱える問題が討論され、優秀作品を選出する過程の時間的および人員的な改善、長編小説を評論する力量の向上、授賞目的や評価基準の明確化により不信は解消されるなどという結論が出された。これは同討論会に参加した作家協会をはじめとする授賞側の認識であり、想定されるべき茅盾文学賞改革の立脚点ともなりうるものであった。

また、文学賞の権威失墜については、1990年代以降、文学賞が乱立したことも間接的な理由として考えられる。特に企業とタイアップした文学賞は、賞の名称に企業名が入ることで企業イメージの向上が図れることと、授賞側としては協賛企業からの高額な賞金と選考過程の報道によって発行部数の拡大を目論めるなど、企業と雑誌社の双方にとって非常に都合がよいため、『人民文学』のような中国同時代文学を代表する雑誌までもがこの類の賞を実施するようになってしまい、結果的に文学賞全体の権威を失墜させることにつながっているという指摘もある。

## 重点作品扶助制度の創設と公布までの経緯

このような批判や権威失墜に対して、中国作家協会は手をこまねいているわけではなかった。2004年3月、中国作家協会は重点作品扶助の募集を開始する旨の通知を公布した。本制度は、応募者から提出された創作計画や作品大綱を中国作家協会が設置する専門委員会が審議し、国家の経済や社会の発展、文化建設の需要に基づき策定したテーマを反映した作品に対しては、資料収集や取材旅費などの金銭的な面のみならず、創作時に出来した問題を解決する手段の提供、刊行媒体の斡旋、当該作品を取り上げた討論会の開催などといった刊行後のプロモーションまでも総合的に援助するといったものであり、刊行後の作品に対して褒賞を与える文学賞を代表とする従来の方式とは大きく異なる、政治の側からの文学に対する新たな関与方式である。

同時に公表された「2004年度重点作品テーマの通達」では、応募者が自らのテーマ以外に選択可能な重点テーマが挙げられている。全体を通して見ると、鄧小平生誕100周年記念、安定した社会の建設、西部大開発、東北の工業地域の振興、三農（農業・農村・農民）問題などがテーマとして挙げられており、まさに国家や共産党が主導する政策に基づき、それを肯定的に評価し、「芸術的に再現」した作品の応募を期待しているのがわかる。

「中国作家協会重点作品扶助事務局通知」が公表される直前の2004年2月には、中国作家協会第六期主席団第五回会議と第六期全国委員会第四回全体会議が開催されている。しかしながら公表された文書には、重点作品扶助制度に関わる事項の報告や記述は見当たらない。

実は、重点作品扶助制度の実施に必要な「（暫定施行）条例」が大筋において決議されたのは、その半年前の2003年8月に開催された第四回主席団会議であった。しかも、扶助制度が単独で登場してきたのではなく、先に述べた文学賞に対する不信と権威の失墜を解消すべく、第六回茅盾文学賞の選考方式に対しての制度改革と合わせた形で重点作品扶助制度は創設されることになったのである。

ただ、実施に向けての規定が議決されたのが2003年8月の第四回主席団会議であったとしても、主席団会議だけでこのような大きな改革事項が決定できるものではない。五年に一度開催の全国代表大会とまでは行かなくても、せめて毎年一度は開催される全国委員会会議で審議決定される必要がある。さらに五ヶ月ほど遡った2003年3月に開催された第六期全国委員会第三回全体会議での作家協会副主席による「活動報告」に重点作品扶助プロジェクト実施を求める報告があり、会議で審議採択された「2003年活動要点」にも、茅盾文学賞の選考過程の改革と並んで重点作品に対する扶助制度を創設する旨の記述が見られた。つまり、茅盾文学賞の改革と重点作品扶助制度は2003年の早い時点で実施が決定されており、約一年かけて実施に向けた制度の整備を行っていたということになる。

## おわりに

1980年代以降、経済成長の成果が顕著になるにしたがい、中国同時代文学にも市場主義、商業主義導入による影響が見られるようになった。それは、作家協会＝政治の側にとっては好ましからざる要素を多く含むものであった。一方、社会の変化に対応することが難しくなった文学賞も、選考過程の透明性や公平性が求められる中、従来の授賞制度は改革を迫られることになった。

重点作品扶助制度の創設からは、社会的な条件の変化に対応しつつ「規範」に則った作品をより多く生産し、「文学創作の正確な方向を堅持させ」（作協規約）、政治の下に文学を従属させようとする中国作家協会の強い意志を感じることが出来る。本制度は、人民が読むべき（だと政治の側が想定する）作品をより多く生産し、プロモーションしてゆくのに適しており、公刊後の作品を対象とするほかない文学賞の方式の行き届かぬ部分を補って余りあるものにするはずのものであった。それゆえ、重点作品扶助制度の創設と茅盾文学賞の改革は、同時に構想され、施行されることになったのである。

この政治の側からの文学への働きかけはどれだけの成功を収めているのだろうか。それについては今後とも考察を続けていきたい。

※報告会当日は、多様な専門分野の参会者から示唆に富むご意見、ご指摘をいただき、自らの研究をふり返る絶好の機会となった。皆様に心より感謝したい。

Profile
国際人間学研究科　心理学専攻教授
速　水　敏　彦（HAYAMIZU Toshihiko）
1975年名古屋大学大学院教育学研究科博士課程修了。『教室場面における達成動機づけの原因帰属理論』で教育学博士（名古屋大学）取得。名古屋大学名誉教授。近著に『感情的動機づけ理論の展開―やる気の素顔―』（ナカニシヤ出版）、近編著に『教育と学びの心理学―基礎力のある教師になるために―』（名古屋大学出版会）。hayamizu@isc.chubu.ac.jp

Symposium

# プラスマイナスゼロのやる気を支える「幸福感」

## プラスマイナスゼロのやる気とは

日常的に使用される「やる気」という概念は心理学では「動機づけ」と表現されることが多いが、いずれも顕在的な目標志向行動を生じさせる潜在的な心理的エネルギーと考えられる。したがって人間のほとんどの行動の背後にはやる気や動機づけが存在するとみることができる。心理学ではこれまでに様々な動機づけ研究が蓄積され、動機づけ理論が構築されてきた。ただし、筆者にいわせれば、その目標志向行動の目標はかなり偏ったものだった。代表的なものが大人の場合なら仕事の動機づけ、子どもでいえば学習の動機づけであったことは間違いない。もちろん、そこでは仕事や学習の質や量を向上させる動機づけが検討されていたといえる。

だが、人間の行動はこのようないわば生産的活動だけではない。ルーチンとして日常的に繰り返され、生命や生活を保持するための行動も少なくない。たとえば家事がそれに該当する。近藤（2010）は「歌手の加藤登紀子さんは『ご飯を作って食べる。洗濯物を汚したらまた洗うというプラスマイナスゼロの家事の積み重ねが女性の強みになっている』と日々の営みの大切さを語っていました」と述べている。この「プラスマイナスゼロの家事」という言葉は実に鋭く端的に家事の性質を表現しているように思われる。家事従事者が夕餉に一生懸命準備して家族を満腹感に浸らせたとしても、また早朝になれば朝餉の用意をすることになる。掃除についても毎日というわけではないにしろ、一度掃除機をかけたとしても数日もすれば同じ箇所にごみが溜まり、再度、掃除をすることになる。このように一度やったことが蓄積せず、しばらくすれば元の状態に戻り、何度も繰り返して同じ仕事をせねばならない。これがプラスマイナスゼロといわれる所以であろう。この種の仕事は炊事・洗濯・掃除等のいわゆる家事だけではない。育児や老人介護もそれに包摂される。ただし、両者には微妙な相違点もある。育児の場合は長い目で見れば結果として成長が期待されるのに対して、介護の場合は回復するとかより健康になるという変化はほとんど期待できない。このような相違はあるもののプラスマイナスゼロの仕事は一定時間が経つと繰り返されること、原則として報酬は期待できないこと、特殊な技能は必要でなく、誰もがほどほどにはできること、率先してやるというよりは生命や生活を持続するために義務的になされることが多いことなどが特徴としてあげられる。

## 家事の動機づけの調査とその結果

速水・小平・青木（2013）は家事の動機づけについての調査を行った。その目的の第1は家事の動機づけにはどのような種類があるかを明らかにすることであり、第2は家事の動機づけの強さがどのような要因に規定されているかを検討することである。まず、これまでの自由記述や面接から収集した動機づけの項目を整理して67項目にまとめた。次にその動機づけの強さを規定する要因として以下のような内容を測定することにした。①年齢、就労の有無、既婚・未婚　②パーソナリティ（外向性・協調性・勤勉性・神経症傾向・開放性）　③価値づけ・重要度（家庭・余暇・仕事・習い事・友人関係）④平等主義的性役割観　⑤人間関係満足度（夫婦･家族）⑥家族からの肯定的フィードバック　⑦家事量（自分・家族）⑧主観的幸福感。調査対象は愛知県下の2つの市の成人1052名である。本研究ではこのうち20代から60代の女性937名を分析対象とした。

その結果、まず、家事の動機づけについては因子分析を実施して次の5つの因子を抽出した。①興味関心・効力感因子：「やることが楽しいから」「達成感が得られるから」など　②義務感因子：「家族に嫌われたくないから」「やらないと恥だから」など　③生活習慣因子：「やるのが習慣だから」「あまり考えずに自然に手が出るから」など　④生活必要感因子：「健康に生きるため大事なことだから」「やらねば生活できないから」など　⑤代替者不在感因子：「誰もやってくれないから」「やるのは私しかいないから」などである。そしてこれらの因子の平均評定値（1.どんな時もあてはまらない～5.いつもあ

てはまる）はそれぞれ2.89,2.59,3.66,3.72,3.57となった。つまり、興味関心・効力感因子や義務感因子に比べて生活習慣因子や生活必要感因子、代替者不在感因子のほうがよりあてはまると回答されている。

次に就労群と専業主婦群の各動機づけについてみたところ、いずれの動機づけについても専業主婦群の方が高いことが明らかにされた。現実の家事量と各動機づけの高さとの関係は図1に示されるように炊事量、洗濯量、掃除量いずれについても生活習慣、生活必要

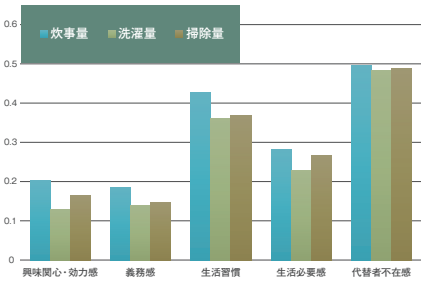



図１　家事の動機づけと自分の家事量との相関関係

感、代替者不在感の動機づけの方が興味関心・効力感、義務感の動機づけよりもその相関が高い傾向にある。すなわち、興味関心・効力感と義務感の動機づけは実際の行動にあまり反映しない。

パーソナリティに関しては、どの動機づけについても協調性や勤勉性が高いほど高いことが示された。また、価値づけに関しては家庭に価値を置く程度との関係について生活習慣因子とは.4に近い高い正の相関がみられたのに対して、代替者不在感とはほぼ無相関であった。

図2は家事の動機づけと人間関係に関連した変数との相関を示したものである。家族の家事行動量についてはどの動機づけとも負の相関が示された。本人の動機づけが高いほど家族の家事行動量は低いといえる。家族の正のフィードバックとの関連は代替者不在感の

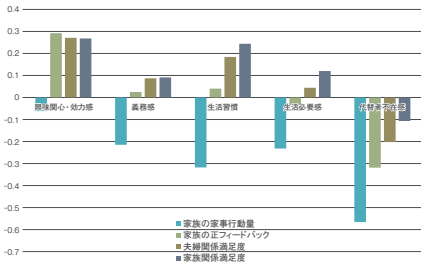



図２　家事の動機づけと人間関係（相関係数）

みが負の相関で、残りは正の相関を示していた。つまり、代替者不在感の動機づけが高いほど家族からの感謝やお礼などのフィードバックが少ないといえる。夫婦関係満足度、家族関係満足度に関しても興味深い結果が示されており、代替者不在感だけで負の相関が認められた。つまり代替者不在感の高い人ほど夫婦関係満足度や家族関係満足度が低くなっていた。一方、特に興味関心・効力感や生活習慣では夫婦関係満足度や家庭関係満足度が高いほどそれらの動機づけも高いことが示された。

主観的幸福感との関係については興味関心・効力感、生活習慣、生活必要感の順に高い正の相関がみられた。興味関心・効力感因子と主観的幸福感の相関が高いのは当然であるが、生活習慣因子との間にも.3に近い相関が示され、無意識的に家事をしている人が幸福感を感じていることが示唆された。一方、代替者不在感とは負の相関がみられた。

## 図と地の行動を媒介する幸福感

先の調査から家事を生活習慣として無意識的に動機づけられてしている場合は、家族からの正のフィードバックをうけ、かつ夫婦関係も家族関係も満足のいくものである場合であったのに対して、代替者不在感から家事をしているのは家族からの正のフィードバックがなく、夫婦関係も家族関係も不満である場合であった。主観的幸福感は前者とは正、後者とは負の関係にあった。これは家事の動機づけの性質は人間関係からくる満足感や幸福感により規定されているためと推測される。たとえプラスマイナスゼロの仕事であっても良好な人間関係があれば、無意識的に行動できる、しかし、人間関係に不満があれば、「代替者がいないから」といったかなり悲壮な気持ちで家事にむかわざるをえないといえる。家事は金銭による評価換算ができないため対人的な評価に転化されやすい、すなわち、無意識的であれ、家事をしてくれる配偶者に感謝したり、家事を手伝ってくれる配偶者をうれしく思ったりすることが望ましい家事の動機づけにつながり、逆にそのような夫婦間、家族間での気持ちのやり取りがないと家事は義務的で重荷になるものではなかろうか。また、生活習慣で家事をする場合は家庭を大切に思っている（価値をおいている）こともわかった。

ところで竹信（2013）は家事ハラ（家事労働ハラスメント）というような言葉を用いているが、それは会社等での生産的で報酬を伴う仕事を人間の図の行動、あるいは表の行動とすれば、家事を地の、あるいは裏の行動と低い価値づけをしているために生じた言葉のように思われる。それゆえ、最近では家事を外国人に任せて女性を職場でもっと活用しようとか、家事はロボットに任せたらとか炊事は宅配に依存しようというような議論もうまれている。しかし、地の行動の部分を他者や機械に担わせれば、図の部分がめざましく機能し、人はより幸福感に浸ることができるだろうか。私は否と考える。上のような考えはある意味、市場主義に毒された見方であろう。金に換算できる仕事だけをするようにした時に、生活の潤いは消え、家庭での人間関係が崩壊に近づくのではなかろうか。家事には金銭換算ができないが、それがなくては生命維持や人間らしい尊厳ある生活が持続できない多くの仕事が含まれ、それをめぐって夫婦が協力し、コミュニケーションすることで日常的な幸福感が生まれていよう。そして、家庭から生まれる幸福感が人の生活の図の部分ともいえる会社等での動機づけにも反映するものと考えられる。家事は短期的にみれば確かにプラスマイナスゼロかもしれないが、それをめぐって様々な人間関係が展開されるなかで、幸福感や逆に不幸感が蓄積されると推測される。そして、それは家庭外のいわば図としての仕事の動機づけにも影響を及ぼすものと思われる。

参考文献

近藤勝重　特集ワイド：ゆうかんなトーク 「女の気持ち」より　中高年女性の幸福感　毎日新聞　2010年12月3日夕刊
速水敏彦・小平英志・青木直子　2013 科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）研究成果報告書
竹下三恵子　2013 家事労働ハラスメントー生きづらさの根にあるもの　岩波新書

Profile

国際人間学研究科　心理学専攻助教

杉 本 英 晴（SUGIMOTO Hideharu）

名古屋大学院教育発達科学研究科博士後期課程単位取得退学。専門は教育心理学、発達心理学。青年から成人への発達過程を、個人が有するソーシャルネットワークによっていかに教育・支援可能かを検討している。近著は、『詳解大学生のキャリアガイダンス論：キャリア心理学に基づく理論と実践』（共著）（2012, 金子書房）。

Symposium

# 就職難で苦闘する現代青年は「不幸」か

## キャリア発達心理学の視点から

### 現代青年の移行の特徴

平成26年度学校基本調査によれば（文部科学省, 2014）、平成25年度学校卒業者（平成26年3月）の就職率は、中学卒業者で0.37%、高等学校卒業者で17.44%、大学卒業者で69.83%となった。中学卒業者の高校進学率が98.41%、高校卒業者の大学進学率が53.79%であったことを勘案すると、さまざまな学校段階の中でも大学から職業社会への移行の比率は大きい。そのため、現代青年における職業社会への移行を検討する際、大学から職業社会への移行がしばしば注目されてきた。

近年、こうした大学から職業社会への移行は、非常に困難な状況にある。1951年以降70%以上を維持していた就職率は、ここ20年間55～70%に停滞している（Figure 1）。若松・下村（2012）は、現代青年の就職状況が彼らの親世代と比べて大きく変化したことを指摘している。たとえば、企業社会の競争が激化し、企業社会への間口が狭小化し、正規就労が困難になった上に、新規学卒者に求められる水準が高くなるなど（若松・下村, 2012）、大学生の就職状況は非常に困難であるといえるだろう。

こうした厳しい状況下で行われる就職活動は、現代青年にさまざまな身体的・精神的ストレスを引き起こす。たとえば藤井（1999）は、「就職決定および就職活動段階において生じる心配や戸惑い、ならびに就職決定後における将来に対する否定的な見通しや絶望感」を就職不安として概念化した。その上で、この就職不安は大学生のストレスや抑うつを高めることを明らかにしている。

また、大学生は長期にわたる就職活動でさまざまな不安に直面するが、そうした不安は就職活動中にとどまらず、就職活動の準備段階や決定後にもあらわれストレスとして蓄積する。日本学生支援機構（2011）によれば、大学の学生相談によせられる相談内容として、「進路・就職」が「対人関係」に次いで相談件数が増加していると認識されている。これらを勘案すると、大学卒業後の進路を決定する過程で個人内では対処できないほどのストレスが、個人に蓄積されているといえるだろう。

このように現代大学生は、大学から職業社会への移行過程で多くの困難に直面する。こうした移行環境は多大なストレスを与えることから、大学生にとって心身穏やかに受け入れられる「幸せ」な環境とは言えないだろう。

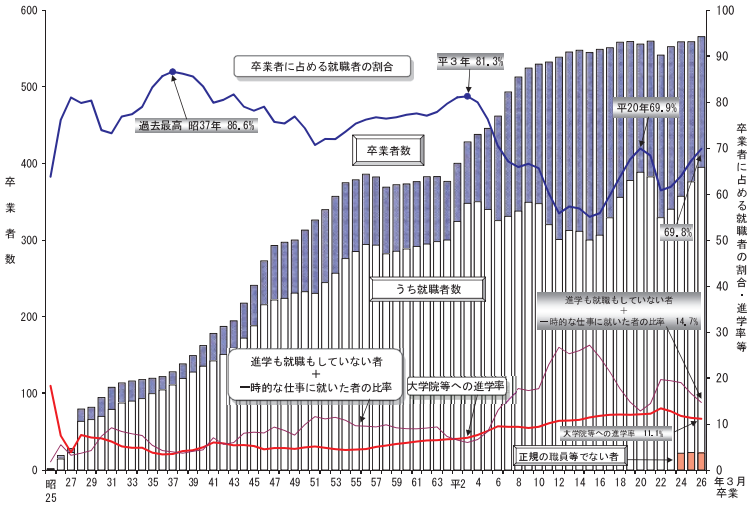



Figure 1. 大学卒業者の就職者数・就職率の推移
出典：「平成 26 年学校基本調査」（http://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/List.do?bid=000001015843&cycode=0）から転用。

### 就職難で苦闘する大学生は「不幸」か？

ただし、中学生や高校生、学校中退者、学卒無業者、フリーター、中高年の転職希望者、定年後の再就職希望者などの就職活動と比べると、大学生の就職活動は困難とはいえない。若松・下村（2012）によれば、大学生の就職活動は新規学卒者一括採用という雇用慣行により、他の立場よりも有利であることを指摘している。具体的には、大学生への企業の求人数が相対的に多いこと、大学生の就職活動のスケジュールがある程度決まっているた

め、大学生は就職活動を行いやすいこと、その上大学そのものが無料で利用できる就労支援機関として機能し、大学生はその援助を得られやすいことなどがあげられる（若松・下村, 2012）。

また、大学から職業社会への移行は、確かに困難ではあるが、こうした厳しい環境は学生に身体的・精神的ストレスなどのネガティブな影響を与えるだけではない。たとえば、浦上（1996）は就職活動で求められる自己と職業の理解・統合が自身の就職活動に対する振り返りを通して自己成長力を高めることを明らかにしている。実際、学生は就職活動を通して、自己理解をすすめ、社会に関心を持つようになる。また、自分の意見を発言する積極性が増し、さまざまなビジネスマナーまで身につける。このように、厳しい環境を乗り越えることによって、大学生は一回りも二回りも大きく成長する。

これらのことを勘案すれば、大学生は厳しい移行環境の中でも相対的には恵まれた環境におり、そうした環境の中で自身のキャリアをより良いものにするチャンスをも持ち合わせているといえよう。

## 偶然をチャンスとして手繰り寄せる

それでは、こうしたチャンスを大学生は自ら手繰り寄せることはできるのだろうか。そもそも、個人のキャリアは予想しない偶発的な出来事によって大きく左右される（Mitchell, Levin, & Krumboltz, 1999）。たとえば、テレビでたまたま取り上げられていた企業に興味を持ったり、学内企業説明会の空き時間に呼び止められた企業にエントリーしてみたら内定がとれたりと、偶然がしばしば自身のキャリアをより良いものにするチャンスとなりうる。

Mitchell et al.（1999）は、人生の中で起こる偶然を人生の計画に組み入れることで、キャリア形成のチャンスとしていかすことが可能であるとして、“Planned Happenstance Theory”を提唱した。その中で、クライエント自身が就職機会を認識し、作り出し、チャンスとして活用するためのスキルを提案している。

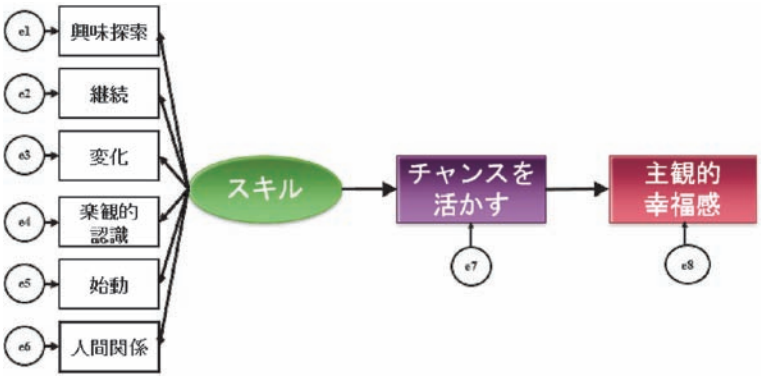



Figure 2. キャリアにおける６スキルが主観的幸福感に及ぼす影響（共分散構造分析モデル）

高綱・浦上・杉本・矢崎（印刷中）では、この“Planned Happenstance Theory”を参考に偶然をチャンスとして活用するスキルとして6つのスキルを想定した尺度を作成した。具体的なスキルとしては、①興味の幅を広げたり、興味のあることを探索、探求する「興味探索スキル」、②苦労することや手間のかかることでも、それを持続する「継続スキル」、③自分の考え方や態度、自分の置かれている環境を、より適応的なもの、より望ましいものへ変化させる「変化スキル」、④結果やプロセスに対してポジティブな見通しを持つ「楽観的認識スキル」、⑤結果や成果が不確かな場合でも、回避せずそれを始める「始動スキル」、⑥「弱い紐帯」をできるだけ多様な他者とつなげる「人間関係スキル」の6スキルである。

その上で、これら6スキルと「チャンスをつかまえて、それをいかすこと」という項目との関連性について検討した。その結果、6つのスキル全てと正の相関（r = .40～.60, ps < .01）が得られた（高綱他, 印刷中）。さらに、主観的幸福感との関連性も検討したところ、これらのスキルを有している者ほど、チャンスをいかすだけにとどまらず、高い主観的幸福感を有していることが示された（Figure 2）。

これらのことから、「興味探索」「継続」「変化」「楽観的認識」「始動」「人間関係」といったスキルは、キャリアにおける偶発的な出来事をチャンスに変えうるスキルであり、スキルによってチャンスをいかせる者ほど、自らの「幸せ」を手繰り寄せることができると考えられる。

## 自らの「幸せ」を掴み取る

就職活動における企業側の選択基準は不透明で、活動しても選考は思うように進まず、内定にまでなかなかたどり着かない者は多いだろう。大学生は綿密な計画を立てても、計画通り就職活動を進めることは困難である。

しかし、だからといって進路選択にとりかからなければ、進路を決定することはもちろん、キャリアにおける偶発的な出来事をキャリア形成のチャンスとしていかす機会をも逸する。

他方、進路選択にとりかかれば移行過程でたくさんの失敗を経験することになるだろう。しかし、そうした失敗もチャンスとして受け入れられるようなスキルを育むことは可能である。大学生が自らのキャリアにおいて自らの力で自らの「幸せ」を掴み取ることができるよう、偶然をチャンスとして活用するためのスキルを育むキャリア教育が求められる。

引用文献

Mitchell, K. E., Levin, A. S., & Krumboltz, J. D.(1999). Planned happenstance : Constructing unexpected career opportunities. *Journal of Counseling and Development*, 77, 115-124.
文部科学省（2014）. 学校基本調査－平成26年度（速報）結果の概要－ <http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/26/08/attach/1350731.htm>（2014年8月31日）.
日本学生相談支援機構（2011）. 大学、短期大学、高度専門学校における学生支援の取り組み状況に関する調査（平成22年度）<http://www.jasso.go.jp/gakusei_plan/2010torikumi_chousa.html>（2014年8月31日）
高綱睦美・浦上昌則・杉本英晴・矢崎裕美子（印刷中）. Planned Happenstance理論を背景とした機会活用スキルの測定　日本キャリア教育学会第36回研究大会発表論文集.
浦上昌則（1996）. 就職活動を通しての自己成長－女子短大生の場合－教育心理学研究, 44, 400-409.
若松養亮・下村英雄（編著）（2012）. 詳解大学生のキャリアガイダンス論－キャリア心理学に基づく理論と実践－金子書房.

Profile

国際人間学研究科　歴史学・地理学専攻（院生）

林　　泰　正（Yasumasa HAYASHI）

1988年生まれ。中部大学人文学部歴史地理学科卒業。中部大学大学院国際人間学研究科修士課程在学中。

単著：林泰正（2014）昭和初期に廃止された鉄道跡地の解体－岐阜県可児市広見地区・東濃鉄道を事例として－．人文地理66-2．20-29.

共著：林泰正・山元貴継（2012）三重県伊勢市における観光バスの動向．都市地理学7．59-72.

Note

# 大正昭和期における交通インフラと地域

## はじめに

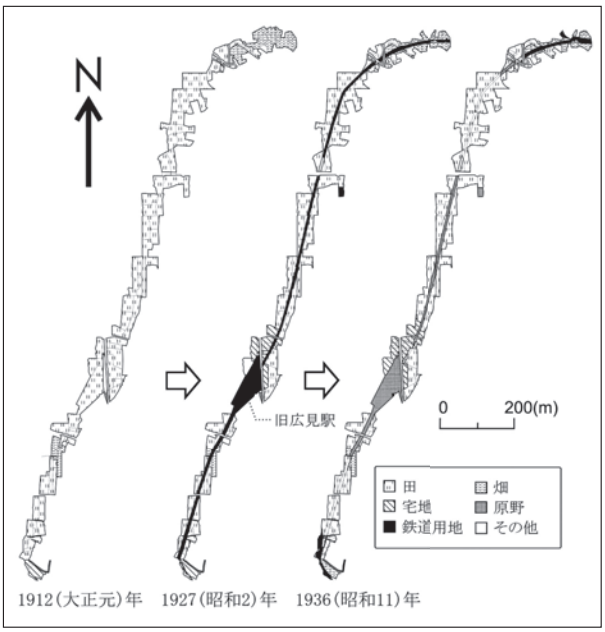
明治後期から昭和初期にかけて、近代的な交通インフラが全国各地で整備された。とくに、特定の地域内で完結する小規模な鉄道が、この時期に全国各地で多数建設された。この鉄道建設ラッシュは、後に「軽便鉄道ブーム」などと呼ばれた。「ブーム」という言葉が示しているように、この時代に計画された鉄道の中には、着工すらできなかったものや、開業後すぐに廃止あるいはルート変更を強いられたものも少なくない。

この時期の鉄道を扱った従来の研究では、地域産業と鉄道事業との関連や、鉄道会社へ出資した人物に注目が集まりがちであった。しかし、鉄道が敷設され後に撤去される一連の過程は、土地利用の歴史的な変化としても捉えることもできる。鉄道跡地は、形状が極めて細長いという特有の条件を有し、それ単体での他用途への転用は困難である。そのため、隣接する土地の条件の影響を受けた跡地利用になりやすいことが想定される。

## 事例：東濃鉄道（岐阜県可児市）

そこで、筆者は、明治後期以降に整備され、昭和初期以前に廃止された交通インフラの事例として、東濃鉄道株式会社によって所有されていた鉄道路線（東濃鉄道線）の広見駅（現在の岐阜県可児市広見地区に存在）付近を取り上げた（林 2014）。この区間は、1918年に開業し、1927年に国有化された後、1928年に広見駅の移設に伴い廃止された。

第1図は、鉄道敷設前から廃止後までの地目（課税上の土地利用）の変化を示した図である。鉄道が敷設される前、のちに鉄道が敷設されることとなる地域は、南へ向かうほど比較的農地としての質が悪く、かつ大規模な土地所有が展開されていた。一方で、北へ向かうほど比較的農地としての質が良く、かつ小規模な土地所有が展開されていた。鉄道廃止後には、南へ向かうほど鉄道跡地が原野として残る傾向がみられ、北へ向かうほど速やかに田へ戻る傾向がみられた。すなわち、鉄道敷設前における各土地の農地としての質や所有関係が、鉄道廃止後の鉄道跡地が再び田へ戻るか否かに影響を与えている可能性が示された。




第１図　東濃鉄道用地をめぐる鉄道敷設前から廃止後までの地目の変化

## おわりに

現代であれば、鉄道の跡地といえば、自治体へ所有権が移った後に遊歩道や自転車道などに転用される事例が連想されやすい。しかし、東濃鉄道の事例では、跡地に隣接する土地の農地としての質や所有者によって、鉄道跡地が古傷のように地域に残り続けるか否かが変わることがわかった。

以上のように、林（2014）では、交通インフラのうち鉄道を取り上げた。しかし、道路や運河などといった鉄道と同様に極めて細長い形状の用地を要する他の交通インフラについても調べていきたい。

引用文献

林泰正（2014）昭和初期に廃止された鉄道跡地の解体－岐阜県可児市広見地区・東濃鉄道を事例として－．人文地理66-2．20-29.

Profile

言語文化専攻ジャーナリズム・コース　博士前期課程２年

Rim Harmessi（ハルメシ, リマ）

チュニジア出身。2012年ESSTT（Ecole Supérieure des Sciences et Techniques de Tunis）卒業。幼少時よりアラビア語イスラム社会向けにローカライズされたアニメを見て育つ。幼少時のあだ名は「まる子」。敬虔なイスラム教徒にして、筋金入りの「アニヲタ」。アニメを通して接した日本文化に憧れ、2013年1月、ついに来日の夢を叶える。それまでの専攻（電気・電子工学）を変更し、現在、アラビア語イスラム文化と日本文化の相互理解を目指し、アニメのアラビア語版へのローカリゼーションを研究中。

Note

# アニメとイスラム

## アラビア語イスラム社会における日本アニメのローカリゼーションとその背景的要因

本発表は、アラビア語TV放送版の「日本製アニメーション」（以下世界的慣習に従ってアニメと呼ぶ）のローカリゼーションの実態とその背後にある諸要因を探ることを目的とした修士論文の途中経過報告である。

分析対象は主としてアラビア語の歴代アニメ人気ランキングサイトの上位TVアニメ番組（アラビア語吹き替え版）10本の第1クール（各13話）と、それらに対応するオリジナル日本語版である。本研究では両者を詳細に比較し、改変されている箇所を抽出してその改変理由を検討した。

その結果、改変は視覚要素・言語要素・聴覚要素・物語要素にわたり、改変理由としては、宗教的規範・文化的規範・道徳的規範・教育的目的・言語文化的障壁によるものが確認された。

まず、視覚要素においては、イスラムの宗教的規範による改変として、女性の肌の露出、飲酒、偶像（拝礼）、異教の儀式（葬式など）・シンボル（十字架など）、お辞儀（コーランでは神への尊崇を示す最上の行為）の場面などが削除されていた。短いスカートやタンクトップ、水着などの着用による女性の肌の露出は、日本においてはアニメの重要要素であるため、全てを削除することは難しく、したがって、色で塗りつぶすなどの処置がなされているケースが多く見られた（図1参照）。

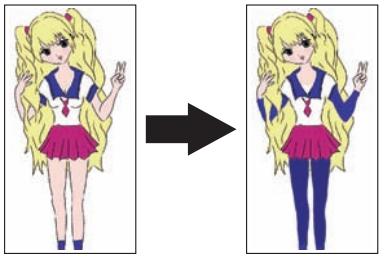


図 1. 肌の露出の修正例（筆者によるサンプル）

文化的規範による改変例としては、年長者への無礼、女らしくない態度、ラブロマンスなどを描いたシーンの削除がある。その他、欧米版のローカライゼーションでも見られるエロチシズム、暴力、流血、喫煙シーンなどの削除も、文化的規範の改変例に含まれる。道徳的規範としては、行儀よくせよ、嘘をつくな、などの規範に反する行為が描かれたシーンは削除対象となっていた。

言語的要素においては、教育目的による改変として教育的な「お説教」の挿入、また、言語文化的障壁の回避を目的とした固有名詞、日本文化固有の事物などの置き換えが確認された。後者の例としては、「えり子」→「オリカ」、「ぎょうざ」→「カバーブ」、「七夕まつり」→「花火イベント」などが挙げられる。

音響的要素では、欧米語版へのローカリゼーションのように「日本的な間」を埋める音響要素の追加は見られなかったが、テーマ曲の差し替えは頻繁に行なわれていた。これは、日本語版ではタイアップにより、物語内容と関係の薄い曲調／歌詞の楽曲が用いられることが多いのに対し、アラビア語版では、より内容に則した雰囲気の曲調や歌詞が好まれるためである。また、特に小さな子ども向けのものでは、彼らが馴れ親しんでいるアラビア音楽の曲調にすることで、覚えやすく、歌いやすい効果を狙っていると推測される。

視覚的・言語的・音響的要素の変更に加え、イスラムの教えに反する世界観（タイムトラベル、若返りなど）や人間関係（親族の不仲、孤児の虐待など）が描かれている場合には、物語自体の設定が丸ごと変更されているケースも多く見られた。

以上のような改変は、'70年代頃から盛んに製作され始めたアラビア語版で長年行なわれてきたものであるが、2010年に始まったチュニジアの「ジャスミン革命」からアラブ世界に波及した「アラブの春」以降、新たな改変の動きも見える。宗教的自由、表現の自由が到来したイスラム世界では、数多くの新しいTVチャンネルが開設され、アニメに対してより厳格なローカリゼーションを施した「イスラミック・バージョン」が登場し始めた。たとえば、コーランの厳密な解釈では、音曲は「アラーへの信仰心を乱し、欲望への扉を開く」とされるため、テーマ曲から楽器演奏が消え、アカペラになっているものなども散見されるようになっている。

本研究は、今後イスラム社会におけるアニメの受容状況の調査結果も加えることによって、研究者にとどまらず、日本政府が「メディア芸術」と位置づけるアニメなどのサブカルチャーの輸出に携わる事業者にとっても有用な情報を提供するものとなる見込みである。

News & Record

# 2013年度 修士論文の提出と審査結果

2013年度 国際人間学研究科博士前期課程において、下記の7名から修士論文が提出された。2014年2月7日に修士論文報告会が開催され、その後、審査委員会による厳正な審査が行われた結果、提出論文はすべて合格水準に到達していると認定された。

| 専　攻　名 | 氏　名 | 修　士　論　文　題　目 |
|---|---|---|
| 国際関係学 | 翁　由美子 | アメリカの対外債務とソブリン・リスク<br>―新興国政府による対米ファイナンス― |
| | 鈴木富好江 | 浜松市に住む日系ラテンアメリカ女性たちの生き方<br>―週末のオシャレ 化粧の選択 アイデンティティー― |
| | 中井　法子 | 中国人と日本料理<br>―中国の大都市地域における日本料理の進出と発展― |
| 言 語 文 化 | 夏目　政美 | 『岩波古語辞典』初版・補訂版の修訂項目を考える |
| | 山田　康二 | 『竹取物語』における神仙思想 |
| 心　理　学 | 野中　一成 | 部活動での人間関係が部活動の継続と日常生活スキル向上に及ぼす影響 |
| 歴史学・地理学 | 伊藤　卓朗 | 満州事変における天皇の統帥権について |

# 2013年度 博士論文の提出と審査結果

2013年度 国際人間学研究科博士後期課程において提出された下記の博士論文は、2014年2月3日に開催された公開審査会で厳正に審査された結果、合格水準に達していると認定された。

| 専　攻　名 | 氏　名 | 博　士　論　文　題　目 |
|---|---|---|
| 心　理　学 | 西垣　景太 | 運動経験がもたらす情動知能への影響 |

# 2013年度 国際人間学研究科博士前期課程学位授与式を開催

2013年度 国際人間学研究科博士前期課程学位授与式が2014年3月22日に行われ，7名の修了生が晴れて修士の学位を取得した。

# 2013年度
# 国際人間学研究科博士後期課程学位授与式を開催

2013年度 国際人間学研究科博士後期課程学位授与式が2014年3月22日に行われ、西垣 景太さんが晴れて博士（心理学）の学位を取得した。

# 国際人間学研究科若手教員による研究報告会を開催

国際人間学研究科で新たに授業を担当することになった心理学専攻の佐藤友美講師と、同じく国際関係学専攻の和田知久講師による研究報告会が2014年7月23日に開催された。この種の報告会は今回が初めてであり、研究科所属の教員、院生をはじめ多数の参加があり、活発な議論が行われた。報告会終了後は、会場を移して懇親会が開催され、さらに議論が続けられた。

# 心理学専攻所属の教員による
# シンポジウムを開催

2013年度に引き続き、国際人間学研究科心理学専攻所属教員によるシンポジウムが、2014年7月20日に、文化フォーラム春日井市で開催された。「『幸福感』をたぐり寄せる心理学」という興味深いテーマを掲げ、5名の教員が現代社会における幸福、幸せのあり方について、心理学的立場から講演した。春日井市・春日井市教育委員会の後援を受けたもので、大学以外の幅広い市民各層との間で対話を試みるシンポジウムであった。

# 大学院生による研究報告会「大学院生の力！」を開催

国際人間学研究科に所属する院生とオハイオ大学大学院の院生による研究報告会を2014年7月2日に開催した。修士論文の作成とは別に、院生が日頃、どのようなテーマに関心を持ち、どのような研究に取り組んでいるかを多くの方に知ってもらうのが主な目的である。とくに、日頃、院生の研究活動に接することが少ない学部生の参加を期待し、学部レベルとはひと味違う研究を披露し、文字通り、「院生の実力」を知ってもらうことを想定したものである。当日は、国際関係学部、人文学部の学生の参加もあり、指導教員によるコメントを含め、様々な意見が飛び交った。初回として、大きな収穫を挙げることができた。

中部大学大学院国際人間学研究科　企画

「大学院生の力！」

学部生　来聴歓迎！！

中部大学とオハイオ大学

大学院生による合同報告会

【第１報告】林　泰正（中部大学大学院国際人間学研究科院生　歴史学・地理学専攻）

「インフラストラクチャと土地の記憶－美濃地方の近代－」

コメンテーター：林　　上（国際人間学研究科教授　歴史学・地理学専攻）

【第２報告】リマ　ハルメシ（中部大学大学院国際人間学研究科院生　言語文化専攻）

「アラビア語圏向け日本アニメのローカリゼーションとその背景的要因」

コメンテーター：柳谷啓子（国際人間学研究科教授　言語文化専攻）

【第３報告】小栗　宏太（オハイオ大学大学院院生　政治学専攻〔中部大学国際関係学部卒業〕）

「性的少数者の人権のグローバルな展開：
逆オリエンタリズム、ホモナショナリズム、ポストコロニアル・ホモフォビア」

コメンテーター：羽後静子（国際人間学研究科教授　国際関係学専攻）

司会：高　英求（国際人間学研究科教授　国際関係学専攻）

2014年7月2日（水）15：30～
会場：中部大学10号館　1024教室

お問い合わせ先：中部大学国際関係学部事務室
〒487-8501　春日井市松本町1200
電話：0568-51-4079（直通）　FAX：0568-52-1325
電子メール：inkn@office.chubu.ac.jp

# 中部大学国際人間学研究科

国際関係学、言語文化、心理学、歴史学・地理学の各専攻は、文化的、歴史的基盤にたちながら、国際社会でコミュニケーション能力や関係構築能力が十分発揮できる人材、あるいは人間、社会、地域の本質を把握し、柔軟に行動できる人材を総力を挙げて育成します。

国際関係学

言語文化　心理学

歴史学・地理学

## 国際関係学専攻

### 科目【博士前期課程】

**国際政治経済研究コース**

政治経済研究特論/国際法特論/国際政治学特論/国際経済学特論/国際機構論/応用計量経済学/国際金融論/国際協力論/開発経済学特論/開発ガバナンス論/発展途上国論/国際社会開発論

**国際社会文化研究コース**

社会文化研究特論/文化人類学特論/国際社会学特論/観光人類学特論/国際ジェンダー論/比較文明論/比較環境論/比較社会史論/比較宗教論/ヨーロッパ社会文化研究特論/アメリカ社会文化研究特論/中東・アフリカ社会文化研究特論/中国・アジア社会文化研究特論/国際比較文明特論/地域言語特殊研究

**共通科目**

研究方法論/臨地研究論/近代世界表象体系

**特別研究**

研究指導/課題指導

**研究科共通**

日本語論文の書き方

### 科目【博士後期課程】

国際政治経済学専門研究演習
国際社会文化論専門研究演習
国際比較文明論専門研究演習

## 言語文化専攻

### 科目【博士前期課程】

**ジャーナリズムコース**

研究基礎（情報収集、メディア・クリティシズム）/現代国家・制度特論/現代史特論/情報産業・流通特論/現代社会特論/社会心理学特論/情報技術とメディア特論/ジャーナリズムと倫理特論/現代の広報特論/報道記事作成技法/ドキュメンタリー作成技法/プロジェクト/研究指導

**英語圏言語文化コース**

応用言語学特論/英語教育法特論/英語学特論/英米文学特論/英語圏言語文化総論/研究指導

**日本語日本文化コース**

日本語学特論/日本語教育学特論/古典文学特論/近代文学特論/日本文化特論/伝承文芸特論/日本芸能特論/国語教育特論/研究指導

**共通**

近代世界表象体系

**研究科共通**

日本語論文の書き方

### 科目【博士後期課程】

メディア・コミュニケーション専門研究
英語圏言語文化専門研究
日本言語文化専門研究

## 心理学専攻

### 科目【博士前期課程】

**心理学科目群**

心理学研究法特論/知覚心理学特論/健康心理学特論

**学校心理学科目群**

認知心理学特論/社会心理学特論/発達心理学特論/臨床心理学特論/教育心理学特論/学習指導法特論/学校教育特論/障害児心理学特論/生徒指導特論/心理検査法特論/学校カウンセリング特論/教育統計学特論

**特別研究**

研究指導/課題指導

**研究科共通**

日本語論文の書き方

### 科目【博士後期課程】

学習心理学専門研究/教育心理学専門研究/認知心理学専門研究/臨床心理学専門研究

## 歴史学・地理学専攻

### 科目【博士前期課程】

**歴史学コース**

日本古代史特論/日本中世史特論/日本近世史特論/日本近代史特論/日本現代史特論/アジア史特論/中国史特論/ヨーロッパ史特論/アメリカ史特論/社会経済史特論/思想史特論/文化史特論/技術史特論/美術史特論/歴史学研究

**地理学コース**

経済地理学特論/産業地理学特論/歴史地理学特論/文化地理学特論/都市地理学特論/地理情報学特論/都市政策学特論/自然地理学特論/地誌学特論/地理学研究

**共通科目**

近代世界表象体系

**特別研究**

研究指導

**研究科共通**

日本語論文の書き方

### 科目【博士後期課程】

歴史学専門研究演習
地理学専門研究演習

Chubu University Graduate School of Global Humanics

●発行：中部大学大学院国際人間学研究科
●編集者：林　　上
●発行日：2014 年 10 月 22 日
●〒487−8501　愛知県春日井市松本町 1200
●中部大学国際人間学研究科（国際関係学部事務室）
●電話：0568-51-4079（直通）　●ファクス：0568-52-1325
●電子メール：inkn@office.chubu.ac.jp
●国際人間学研究科ホームアドレス：
http://www3.chubu.ac.jp/graduate/global_humanics/